長期追跡調査における
調査者と調査参加者の関係の変容

― 福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査2013年～19年を中心に ―

成　　元　哲
三　上　直　之
牛　島　佳　代

『中京大学現代社会学部紀要』　第13巻　第2号　抜　刷

２０１９年１２月　　PP. 127～178

長期追跡調査における
調査者と調査参加者の関係の変容

― 福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査 2013年～19年を中心に―

成　元　哲
三　上　直　之
牛　島　佳　代

1．調査者と調査参加者の関係：調査研究のあり方に関する意見

原発事故後、住民の間で放射線リスクをめぐる認識のずれがあり、対処行動にばらつきがみられる地域、すなわち、分断のトラウマを抱える地域に、調査研究を目的として介入する場合、その介入行為がすでに存在する分断を増幅したり、新たな分断を生み出したりしてしまう危険性がある。筆者らが 2013 年から 2019 年まで毎年、福島県中通り地域の親子を対象として実施してきたパネル調査「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」では、調査の主目的である親子の健康と生活に関する記述の他に、「調査研究のあり方」に関する意見が数多く寄せられてきた。その中には、具体的な方法だけでなく、調査を実施することへの厳しい批判の声もあり、それらを受け止めつつ、調査を継続している。

社会調査のあり方については、これまでも調査倫理や研究倫理の一環として議論されてきており、学会の倫理綱領などでも遵守・配慮すべき事項がまとめられている。例えば、日本社会学会の「倫理綱領に基づく研究指針」は、研究目的や過程、結果が、社会正義に反したり個人の人権を侵害したりする恐れがないかを検討すること▽対象者への説明（調査拒否の自

由を含む）や、個人情報の保護、調査拒否の自由、その他対象者への誠実な対応を通じて、調査研究対象者の保護に万全を期すること▽結果公表によって対象者が損害を被ることがないよう、内容についての事前了解を得ることを含めて十分に配慮することなどを研究者に求めている（日本社会学会 2016）。

これ自体は、調査を行う者が従うべき原則として、大方の同意が得られる内容と言えそうだが、ここには、調査の現場に臨んで研究者が具体的にすべきこと、してはならないことが、必ずしもマニュアル的に詳しく記されている訳ではない。どういった対応が「誠実な対応」であり、どうすれば調査協力者を「万全」に「保護」できるのか、調査実施や結果公表が及ぼす影響に備えて、何をすれば「十分に配慮」したと言えるのかといった点は、個々の調査者に委ねられている。これは一つには、同指針が述べているように「社会学研究は対象や方法がきわめて多岐にわたるだけに、一律の基準を課すことは困難」であることが理由である。調査の現場において、何が責任ある対応であるかはケースバイケースであり、詳しい手順の一般化にはなじまない。

ただ、具体的な行動指針を必ずしもマニュアル的に書けない理由には、もう一つ別の次元の話があるように思われる。ここで想定されているような説明や配慮を尽くして、万全の対応で臨んだとしても、調査を実施するという行為が対象者を傷つけてしまう場合がありうる。そうした状況に研究者がいかに向き合い、調査の実施の是非を含めて、いかに判断すべきかといった問題は、おそらくは当の調査研究の一部として研究者自身が引き受け、考えていく必要がある。その結果として、上述したようなケースバイケースの対応の方針が見出される場合もありうるので、これら二つの次元は互いに関連し合っているとは言えるだろうが、いずれにせよ、マニュアルやルールなどの形では一般化しがたい事柄であることは間違いない。

本稿では、調査対象者からの声、とりわけ、電話による問い合わせ記録と、調査票の自由記述の変遷を分析することによって、分断のトラウマを

抱える地域における社会調査が、分断の再生産につながらないようにするためには何が必要かを考えるための手がかりを見出したい。

2. 電話とメールによる問い合わせ記録「調査日誌」の分類

福島子ども健康プロジェクトは、2013年から毎年1月に、福島県中通り9市町村（福島市、郡山市、二本松市、伊達市、本宮市、桑折町、国見町、大玉村、三春町）に、2012年10月から12月の間に住所を持っていた2008年度出生（2008年4月2日～2009年4月1日生まれ）の子どもとその母親（保護者）を対象にアンケート調査を行ってきた。アンケート調査では、その時々の子どもの生活の様子と健康状態、母親の地域での生活、心身の健康などについて尋ねている。自主避難区域である福島県中通り9市町村において、親子の生活と健康がどのように変化していくのかを、子どもたちが大きくなるまで定期的に調査を続け、「生活記録づくりを通じた福島の親子への伴走」をするとともに、その記録を次の世代に伝えていくという目的で、2013年からこれまで7回の調査を実施した。

2013年の1月末に第1回の調査票を送付してから2月末までの間に同一人物からの同一内容に関する複数回の問い合わせを「1件」とした場合、調査対象者から事務局へ、電話およびメールで合計45件の問い合わせがあった。問い合わせがあった調査対象者の名前や、日時、内容などは、調査事務局において全て「調査日誌」に記録してきた。その記録によると、問い合わせの内容は調査票に関するものと調査についてのものに大別できる。

まず、調査票については、①回答の仕方について、②宛先の間違いであるとの連絡、③該当者が住んでいない、④名前の漢字の間違い、⑤住所変更の連絡、⑥紛失や汚損などで調査票を再送してほしいという要望などである。

次に、調査については、①名簿をどのように入手したか、②調査の名義後援についての疑問の声、③調査対象者の年齢が、なぜ2008年度出生児

であるかについて、④調査対象ではないという疑問の声（事故当時、福島に住んでいなかったから、避難中だからなど）、⑤調査そのものが不快であるという怒りの声、⑥調査が信用できるものなのかを確認したいという声、⑦調査の目的についての疑問、⑧研究材料にしているのではないかという疑問、⑨他県からみると、福島は危険なのかという声、⑩福島子ども健康プロジェクトのメンバーなどについての問い合わせ、⑪調査に協力したいという意見などであった。そして、特記すべきことは、調査対象者6191名の子どもの保護者のうち一人から、当時、調査事務局を置いていた福岡大学医学部公衆衛生学教室と同大学の倫理審査委員会、調査の名義後援先の市町村の窓口と福島民友新聞社などに、個人情報の取得方法や調査のあり方などをめぐって、複数回の苦情が続いたことである。この調査対象者に対して、調査事務局の研究者、共同研究者らが複数回にわたって電話で対応した。だが、調査対象者は納得せず、最終的には、福島県弁護士会人権擁護委員会へ人権救済申し立てを行った。調査主体の執筆者らは、個人情報の取得方法をはじめとする一連の調査プロセスに関する回答書を2013年6月12日に提出している。

3. 調査のあり方に言及した自由回答の分類

福島子ども健康プロジェクトの調査では各回とも調査票の末尾に表1のような自由記述式の質問を設け、調査参加者に回答を求めてきた（調査全体の回答状況については、表2を参照）。ここでは、第1回（2013年）から第7回（2019年）調査の自由回答、合計4721件のうち、調査のあり方に言及したもの（同調査やプロジェクトに対する意見を含むもの）507件を分析の対象とした（表3）。これらの件数は、7回を通じて自由回答欄に記入した人、あるいは、その記述の中で同調査やプロジェクトに対する意見を述べた人の延べ人数である。507件の分析対象を抽出するにあたっては、4721件の回答を全て読み、調査のあり方に言及した自由回答が特徴的に含むキーワードとして、「アンケート」、「研究」、「調査」、「質問」、「プ

ロジェクト」、「カード」の６つを特定した。これらのキーワードを含む回答を機械的に抽出した上で、その中から調査のあり方に言及した回答ではないことが明らかなものを除外し、今回分析対象とする507件を同定した。

表１　自由回答欄の質問文

	質問文
第１回（2013年）	この貴重なご意見をもとに、今後、小さなお子さんを持つお母様たちが、原発事故や子育てに関する不安を自由に語り合う場を作りたいと考えております。ご自由にご意見をお書きください。
第２回（2014年）	私ども「福島子ども健康プロジェクト」は、今後も小さなお子さんをもつお母様（保護者）のお声を社会に届けていくお手伝いを続けていきたいと考えています。下記にご自由にご意見をお書きください。
第３回（2015年）	東日本大震災・福島原発事故から、まもなく４年になります。今の心境を率直にお書きください。
第４回（2016年）	東日本大震災・福島原発事故から、まもなく５年になります。今の心境を率直にお書きください。
第５回（2017年）	東日本大震災・福島原発事故から、まもなく６年になります。今の心境を率直にお書きください。
第６回（2018年）	東日本大震災・福島原発事故から、まもなく７年になります。今の心境を率直にお書きください。
第７回（2019年）	東日本大震災・福島原発事故から、まもなく８年になります。今の心境を率直にお書きください。

表２　調査の回答状況（A 調査対象者数　B 回答数　C 回答率（%））

第１回調査（2013年）			第２回調査（2014年）			第３回調査（2015年）			第４回調査（2016年）		
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
6191	2628	42.4	2628	1606	61.1	1605	1209	75.3	1297	1021	78.7
第５回調査（2017年）			第６回調査（2018年）			第７回調査（2019年）					
A	B	C	A	B	C	A	B	C			
1026	912	88.9	1019	832	81.6	936	814	87.0			

表３　自由回答件数

	計	第１回	第２回	第３回	第４回	第５回	第６回	第７回
自由回答総記入数(件)	4721	1203	718	746	612	549	451	442
調査に言及した回答の数(件)と割合(％)	507 (10.7)	144 (12.0)	104 (14.5)	62 (8.3)	47 (7.7)	51 (9.3)	38 (8.4)	61 (13.8)

こうして抽出した507件の回答を、取り上げられているトピックに応じて、「調査というもの全体について」、「本調査について」、「研究について」、「調査票の問いについて」、「本プロジェクトについて」、「カードについて」、「謝礼について」の７項目に大分類し、それぞれについて、「肯定的な意見」、「否定的な意見」、「疑問」、「期待･注文」、「その他」の５項目に分類した。１件の回答が、複数のトピックに言及している場合、２項目以上の大分類で重複してカウントした。

次節では、分類項目ごとに代表的な自由記述を示す。各記述の末尾の数字は調査年と、それぞれの年に到着順に付した調査票の整理番号である。

表４　調査研究のあり方についての自由回答の分類

	第１回	第２回	第３回	第４回	第５回	第６回	第７回
調査というもの全体について	21	6	3	1	0	0	1
肯定	0	0	0	0	0	0	0
否定	11	4	1	0	0	0	0
疑問	6	0	0	1	0	0	0
期待・注文	3	0	0	0	0	0	0
その他	1	2	2	0	0	0	1
本調査について	83	44	29	18	31	21	33
肯定	6	4	6	5	9	13	21
否定	29	17	7	2	6	1	3
疑問	15	9	7	2	0	1	2
期待・注文	28	12	5	3	9	3	2
その他	5	2	4	6	7	3	5
研究について	8	4	3	0	2	1	2
肯定	0	0	0	0	1	0	2
否定	3	0	0	0	0	0	0
疑問	0	1	0	0	0	0	0
期待・注文	5	3	3	0	1	0	0

その他	0	0	0	0	0	1	0
調査票の問いについて	33	15	6	6	5	2	8
肯定	1	1	0	0	0	0	0
否定	13	7	1	1	1	0	3
疑問	3	1	1	2	0	0	0
期待・注文	4	0	0	0	1	0	1
その他	12	6	4	3	3	2	4
本プロジェクトについて	22	24	7	3	5	4	9
肯定	9	13	4	3	3	3	9
否定	2	1	0	0	1	0	0
疑問	1	0	0	0	1	0	0
期待・注文	9	10	2	0	0	0	0
その他	1	0	1	0	0	1	0
カードについて	0	29	22	21	13	13	16
肯定	0	29	21	21	13	13	15
否定	0	0	1	0	0	0	1
疑問	0	0	0	0	0	0	0
期待・注文	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0
謝礼について	6	5	1	0	1	1	1
肯定	0	2	0	0	1	0	1
否定	3	1	0	0	0	0	0
疑問	0	0	0	0	0	0	0
期待・注文	0	0	0	0	0	0	0
その他	3	2	1	0	0	1	0

4. 調査のあり方に言及した自由回答の分析

4.1　調査というもの全体

調査というもの全体に関する言及は、調査されること、様々なアンケートや検査などについての声である。第 1 回調査（2013 年）では否定的な意見が多かったが､徐々に減少し､第 4 回調査（2016 年）以降は 0 件となっている。まず、その否定的な意見から紹介する。

（1）否定的な意見

「このようなアンケート、調査の書類を見るたび複雑な気持ちになります。事故の時、妊婦でした。子ども 2 人とも調査の対象になることが多くどこやら分らないアンケートにたくさん答えてきました。これで子どもたちが何事もなく大きく育ってほしいというそれだけの願いでです。でも実

験や研究材料のために生きているわけではありません。子どもたちがそんな思いしないようにしてほしいです。研究材料や調査をされるように生んだわけではありません。福島に住むことでそのように対象にされることが少し傷つき悩みます。」（2013-844）
「なんで、福島の私達だけ、このようなめんどうなアンケートに答えたり、原発の影響で！子供達の体の影響を、心配しなければならない状況が、続くのか、と思う。」（2013-28）
「いろんな団体？国から医大からと、面倒くさい細かいアンケートを依頼され、正直うんざり。協力してもほとんどその結果についてのフィードバックがなく、自分の子供のデータだけとられているような気分。」（2013-87）
「このようなアンケートも必要でしょうが、私達がしてほしい事はもっとあります。本当にしてほしい事をしてもらえず、アンケート・調査・検査ばかりです。どのようなものに使われているのか、全くわかりませんが、私達には形として残る支援は全くありません。」（2013-1906）
「このようなアンケートや、行動について、書くことが多いのですが、こういうものを書くことがストレスです。私達のことを想ってのこととは思いますが、こういうものをストレスと思う方も多いことを知ってほしい。」（2013-120）

（2）疑問
「色々とアンケートをとられ、調査票を出しますが、何のためにどのくらい私たちのたすけになるのか。まるでモルモット！！」（2013-336）
「原発事故後、色んなアンケートとかに答えてきました。本当に福島県民の為になっているのか不明です。『ご協力』を要求されるばかりです。」（2013-2279）
「線量計を配り、データをとったり、アンケートをとったりしているが、あまり役立っていると感じられない。データを収集しているだけで、その後の取り組みにつながってきているのか疑問に感じる。」（2016-369）

（3）期待・注文

「このように調査がくることがありますが（たまにですが）、それには正直にお答えし、私たちの現状を知っていただくと同時に、私たちの発信を受けて一人でも多くの方々に正しい知識をもって理解ある人が増えていってほしいと願っています。」（2013-1052）

「原発事故以降、様々なアンケートに答えてきましたが、その後、目に見える改善は見られないように思います。私の周りでは、もう誰にも期待せず自分達でやって行くしかないと半ば諦め気味の方もいます。みんなが納得するような改善策を出すのは難しいのは分かりますが、目に見える改善を何か１つしてほしいと思います。」（2013-1307）

（4）その他

「原発事故後、いくつかの団体からこのような内容のアンケートの協力を頼まれ、回答してきた。その度に原発事故は夢ではなかったのだなあ…と何と表現すればいいのかわからないが、心が痛む。」（2013-834）

「いろいろな団体からこういったアンケートがよくあります。その度にいろいろ考えさせられます。（中略）時々、このようなアンケートに答えるとき、答えたあと、これで良いのかと不安になることもあります。」（2015-556）

「いろいろなアンケートに回答する機会が多くあります。答えるのも似たような内容なので、一つに集約してもらえないものかと思います。」（2015-900）

4.2　本調査について

本調査（福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査）については、第１回（2013 年）から第３回（2015 年）までは否定的な意見が多く、第５回（2016 年）以降は肯定的な意見が多くなっている。本調査に対して理解を示す人が回答しているためか、それとも、サンプル脱落が原因である

のか、分析結果と照合する必要がある。

調査に対する批判的な回答として最も数が多かったのは、調査の依頼を郵送で受け取って生じたネガティブな心情を記したものである。その心情として特に多いのは、調査の依頼を受けたり回答したりすること自体が、ストレスや心痛、不愉快の原因となったり、調査をきっかけに不安になったりするという内容である。第１回調査で、とりわけその数が多かったが、第２回以降もこのような訴えが一定数続いた。

調査依頼に対して、自分たちや自分たちの住む地域が「研究の材料」、「実験台」とされていると感じ、不愉快になったり、落胆したりするという反応が目立つ。

第１回調査の際には、調査票が福島県外から送られてきたことに対する不快感や不信を述べる回答もあった。ちなみに、調査票の発送元、すなわち、問い合わせ先の調査事務局は第１回から第３回までは福岡大学医学部（福岡市）、第４回以降は中京大学現代社会学部（愛知県豊田市）である。

（1）否定的な意見

「全てが無意味に感じます。このアンケートは何の為ですか？これから先子供達にどのような影響がでるのか不安です。この不安を解消する事は少なくともアンケートではないと思います。」（2013-177）

「今回、アンケート実施することの説明書が同封されていましたが、率直な意見として、『なぜ福岡大学から、うちの子供に書類が来たのだろう？』と疑問を持ちました。文部科学省科学研究費の助成があり…とのことですが、私個人としては、こういったことをやるために居住区（二本松市）からの文章がまず欲しいです。正直原発事故があってから『福島県民が研究材料。今後のモルモット』であると感じています。実際に私達がアンケートに答えたり、その他のことに協力することが今後に活かされると思うので協力は惜しみません。しかし、上記した気持ちがある中で突然福岡県から資料が送られてくることは正直うれしいものではありません。自分でも

こう感じることが事故後の気持ちの変化だと思っています。しかし、現在福島に住むしかない状況の人の気持ちをもっとくみ取ってほしいです。」(2013-199)

「毎年これ（アンケート）を続ける意図が分からないし、公表する必要があるのかよく分からない質問が多い。何を目的としているか分からないアンケートが続くのはどうかと思います。子育てに不安はあるものの、原発（事故）が全てではありません。色々な意味で環境を整えることは重要だと思いますが、アンケート内容を公表する目的をもっと明確にして内容を絞ってください。」(2013-436)

「今更？この年の子供はほとんど県外に移住済みです。それすら理解せずにアンケートを？自由に語り合うなんて。この先も大丈夫と思っているママと、不安をかかえながらしょうがなく住んでいるママと移住計画中のママが語り合うなんて戦争。」(2013-484)

「結局は、今も福島に住んでいるという事は、なんだか実験台のモルモットになった気分です。将来どんな影響があるかわからなく、こういうアンケートが来るというのもより不安にさせます。(何かあるのか？何を調べているんだろう？とか) とにかく、不安でいっぱいです。」(2013-1222)

「県外からの、お力添えはありがたいと思いますが、正直なところ、そのようなアンケートに答えるのにも心が痛みストレスを感じます。目を逸らしてはいけない重要なことではあるけれど、自分自身の精神を正常に保つには、何もなかったかのように出来れば今まで通りに過ごしたい。」(2013-2030)

「こんな調査して、何の役に立つのかな？と思う。災害の事、原発の事、忘れていたのに、また思い出して書くというのは、気分が良いことではない。このような調査で、余計に不安になってしまう親が多いのではないでしょうか？」(2014-542)

「以前、提出したデータの集計結果が公表されている？と思いますが、このプロジェクト自体があまりメジャーではなくデータの正確性や公平性が

あやしいのではないかと個人的には思いました。（何に使われるかわからないので周囲の友人等はこのアンケートに答えないと言っていました）」（2014-962）
「福岡から、わざわざアンケート用紙…福島市民は今、モルモットなのだから仕方ないか…私の子供達も…。」（2014-1051）
「このアンケートの集計したものを見せていただきましたが、集計してもらったところで、何もいいことはないような気がします。これをもとにして、皆で（被災者皆で）良い方向に進んでいければよいのですが。」（2016-304）
「このアンケートこそが震災をフラッシュバックさせていることも考えましたか？」（2017-47）
「6年たって、このアンケート内容は、この先ずっと変わらない返答をすることになると思います。ですので、これからは不要に思います。いままでありがとうございました。」（2017-437）
「このアンケートも、少し嫌な気持ちになります。私たちは気にしていないけど、遠くの人は気にしているのだなと思います。」（2019-519）
「アンケートが来るたびに嫌な思い出がよみがえります。正直、もうやりたくないという気持ちと、個人情報の心配等もあり、返答したくないなあと思うことがあります。まだまだ続くのでしょうか。」（2019-701）

（2）否定的で疑問がある
「生活をする事で言葉に出せない苦労があります。アンケートで全てを説明することはできません。（中略）このようなアンケートがくると、本当に大丈夫なのかと不安になります。前例がないことなので、誰も正確な解答を出せないのもわかりますが、不安に思ってしまいます。このアンケートで何がわかるのでしょうか。」（2013-1199）
「失礼な発言だとは思いますが、毎回、モルモットという文字が頭をよぎります。このようなアンケートに答え、どの程度、社会は理解してくれる

のだろうか？どの程度、情報を発信してくれるのだろうか？ちょっと疑問に思います。おそらく将来まで続くであろう、このようなアンケート。子供がある程度、大きくなり、自分のことをこのようなアンケートされると分かった時のことを思うと心が痛みます。」（2014-657）

「このアンケートを提出するにあたり、何か、私達の生活に変化や子供達の将来に役にたつのか？国とかが原発に対して、子供達に対して責任を取ってくれるのか？環境がきちんと整えられてくれるなら協力してもいいが､そうでないのであれば､結構アンケート提出も時間におわれていると、大変申し訳ありませんが、面倒くさい。こういったアンケートに文部科学省研究費を使うなら､もっと子供達のための助成に使ってほしい､と思う。」（2014-1340）

「毎回書いていると思うが、何のための調査？答えさせるだけ答えさせて、何かサポートがあるわけでもない。何かしてくれているのですか？」（2019-528）

（3）否定的で疑問があるが、期待・注文がある

「福島市から、室内遊び場は、どう作るべきか？などのアンケートを配布すべきです。自分達の勝手な思いで室内のおもちゃや遊具をおいている。実際、子供達の親の意見をもって、もっときくべきだ。今まで一度も福島からアンケートなんてきたことありません。問 37 ～ 39 の質問（2013- 問 37：あなたとあなたの配偶者が最後に卒業した学校はどちらですか。2013- 問 38：同居している家族全体で去年 1 年間の収入はどれくらいですか。　2013- 問 39：お宅の現在の家計の状態についてどのようにお考えですか。）の理由は何ですか？何の意味のあるアンケートなのか、とても、不愉快な気持ちになりました。このアンケート全体が、今さら？と思いますし、どこに問い合わせても、私達のうったえる言葉はとどきませんでしたよ。」（2013-1093）

（4）否定的だが、期待・注文がある

「こういった調査や内部被ばく検査の案内、更には健康相談コーナーの開催などによって、ありもしなかった不安を呼びおこすのはやめていただきたいと思っています。関心をお寄せいただくのは大いに結構ですが、この調査の集計結果などを見せられても違う考え（今すぐ避難したいのにできない、不安で仕方ない等）に失望するだけなので、全く希望いたしませんし、それならばもっと国や行政に働きかけて、魅力あふれる福島県をつくる知恵をお与えいただきたいと思います。」（2013-1095）

「選択肢のすみずみに“福島の子供は可哀想”という仮説のもとに考えられた質問票であるように感じ、イライラします。福島県だけで調査してもControlがなければ比較のしようがありません。こんな無駄なアンケートにかけるお金があるなら、直接福島に寄付してください。この質問票に答える人は、どんな人か…選択バイアスがかなりあるはず。回収率も必ず発表してくださいね。」（2013-1459）

「このアンケートに答えることに少し抵抗がありました。あらゆる調査等が福島の子ども達の本当に良い事なのか…？ただの実験材料にならないか…？このアンケートが福島復興、及び未来を担う子ども達のためになる事を願います。」（2013-2151）

「正直、このアンケートに対し、必要なのか、また情報や個人情報がもれていないのかなど、心配や不安、不信を抱いています。ただ、市などとは別に行っているからこそ、今の私たちの、ありのままの姿を、うそなどなく伝えていただけるのでは…と信じてアンケートに答えています。」（2014-226）

批判的な記述として次に多かったのは、依頼した調査や、福島子ども健康プロジェクトに対する疑問や批判である。寄せられた疑問や批判は多岐にわたるが、代表的なものは次のとおりである。まずは、調査やプロジェクトの目的や意義自体に対する疑問である。この調査が、原発事故によっ

て生じている様々な問題の改善や解決にどのようにつながるのかがわからない、あるいは改善や解決につながるように思えないといったコメントである。

（5）疑問

「今後、アンケートに答えた事によって何かかわりますか？教えてください！！」（2013-98）

「福島から遠くはなれた、放射能とは無縁の貴団体がなぜ、このようなアンケートを実施するのか？その意味はあるのか？」（2013-1064）

「Q3 の A3 で小学校入学まで年 1 回の調査と書いてありますが…本プロジェクトは 5 年で終了するということでしょうか？そうであれば、5 年の調査でどういうことがわかり、どう活用されるのか教えてください。」（2014-733）

「子供の健康に何かが起きたとしても、〝因果関係はなし〟で終わるのに、何を調査しているのかわからない。」（2015-301）

「結果をまとめて県内の同じ子育てをしている方々へ報告する…それがこのアンケートなのですね。これで安心できるのでしょうか？不安を共有しても、本当の「安心」にはつながらないような…今をやりすごして生きている県内の子育て世代のみな様が本当に心から笑い合え、県内で安心した子育てができるようこのアンケートを回答して力になれたらと思います。」（2016-197）

「いつもこちらのアンケートに参加させていただいておりますが、こちらに気持ちを正直に書いたことによって、何か良い方に変わりますでしょうか…。私の声は、肝心な方々に届きますでしょうか…。」（2019-29）

（6）疑問と期待・注文が入り混じっている

「調査の対象が 20 年度生まれの子ども達なのは何か理由があるのでしょうか？この調査が有意義に活用され、福島の子が不安なく生活できるよう

になることを願っています。」（2013-981）
「この調査の対象がなぜこの学年の子どもになったのか、くわしく説明していただきたいです。また、不安を語り合う場を作るだけでなく、その不安をどうしたら払拭していけるかが重要だと考えます。」（2013-1453）

（7）期待・注文
「震災後、公の機関からの情報が信じられなくなり、とても不安な日々をすごす中、原発事故の為、いろんなアンケートに答えてきました。その度に不安をかきたてられます。そして、結局は、私たちはモルモットで、今後どうなるのか誰も判らないから、アンケートという記録を取り続けているんだろうなぁ、と思います。どうか、ただの記録におわるのではなく、後世に役立つものにしてください。」（2013-292）
「こういったアンケートをする事で、何か変わるとは思えません。しかし、他の人たちに少しでも現状を知っていただければと思い答えました。モルモットでしょうと思いますが、先生方に希望したいと思います。」（2013-446）
「今はまだ放射能からの影響があるのかないのか分からない状態だと思っています。もし将来福島に住んでいた人、子供たちが他の地域に比べて病気の発症が目立ってしまった場合、放射能の影響か分かるようにたくさんこのような調査、データを大切にとっていてほしいと思います。」（2013-470）
「以前はこのような調査について、『実験台ではないか！』といら立つ気持ちが強かったのですが、間もなく2年になる今、これからこんなひどい事故がもしおこってしまった際の参考になるのならば、と今回は協力させていただきました。」（2013-489）
「保養の必要性を訴えてほしい。調査のための調査にしないでほしい。」（2013-1006）
「今回の調査結果が、どのように公表され、どう生かされるのか、ただの

データとしてでは無く、未来への道程の一部として生かしていただければ情報提供に異存はありません。」（2013-1053）
「調査結果を公表して、ぜひ行政の方でも活かしていただきたいです。」（2013-1480）
「原発事故に対する心情は大変複雑です。安易な予測による結論を出さないようよろしくお願いいたします。ぜひ現地での生の声、本音の部分を聞いた上で、（アンケートには出てこないものがあると思います）今回のデータの分析をしてくださいませ。」（2013-1589）
「今まで、国や市の対応が遅く、アンケート等や意見会で話し合いを行っても実行してくれているのか分からず、結果良い方向に向かっていない事が多かったので、アンケートをもとに、住みやすい環境に変わっていく様宜しくお願いします。」（2013-1905）
「アンケートを記入しながら、何故私はこんなアンケートに答えなくてはならないのか、何故娘がこんな対象にならなくてはいけないのか、涙が出そうな気持でした。でもこのプロジェクトが、この調査が私達親が望まぬ研究のみに使われるのではなく、子供達の健康、心のサポートにつながる意味のあるアンケートだということを切に希望します。それを信じて、記入しました。」（2013-1929）
「実行できる仕組みを本当に考えてください。アンケートを取るだけで終わらないことを期待します。」（2013-2345）
「福島での子育てを安心してできるように、この調査を十分に活用し、結果でなく成果を私達に返してください。子どもたちの一生は親の手にかかっていますから。どうぞよろしくお願いします。」（2013-2397）
「様々な調査、アンケートに協力してきましたが、これといって具体的な効果・成果が得られたもの私たちに良い影響として返ってきたものは 未だにないのではないかと思っています。もし、皆さんが努力されているとしても私たちにはその実感がありません。ぜひ、この調査を、具体的な、施策の提出のために役に立てていただき、きちんとそれを私たちに示して

いただきたい。」（2014-72）
「調査をしたから、いつ私達の生活にそれを反映させてくれるのか、不安を期待にかえ、この調査に参加しました。子ども達の未来を明るくしてください。」（2014-671）
「アンケート記入させていただきますので、しっかりと国や東電、社会に向けて、この声を届けていただきたいと思います。」（2014-810）
「どうかこの調査を続けてください。そして、世間に〝声〟として発信してください。（中略）どうか、福島に生きる人間の声を伝えてください。よろしくお願いいたします。」（2014-1356）
「このアンケートの目的、子どもたちが健やかに成長する環境を整えるのに必要な施策の提案、ぜひ実現するようによろしくお願いいたします。」（2016-802）
「この様な正式な調査のまとめは、今後の震災や大きな社会的事故に対する、普段の行政や市民の行動に大変役立つものと確信しております。今後、これらの貴重な調査研究の結果を広く社会に広報され、役立たれることを期待しているところです。」（2016-898）
「（アンケートに答える）みなさんの小さな声にも耳をかたむけていただけたらと思います、少しでも伝わることがあればよろしくお願いいたします。」（2017-34）
「皆様の行っているこの調査が、これからの我が子達や未来の子供達、社会への参考となることと思います。」（2017-455）
「（「放っておいてほしい」と思う人たちの多くは、こうした調査に回答することもないかもしれません。そういう意味でも、ここで少しばかり声をあげさせていただきました。）調査に対する批判ではありません。世の中のそういう、一部の声ばかりが大きいという現実も、心に留めながら調査していただければと思い書きました。ぜひ福島に来て、特殊な団体だけでない一般の人の声もきいて、福島の空気を感じてほしいです。」（2017-499）
「本調査の目的、子どもたちが健やかに成長する環境を整えるのに必要な

施策を提案する、とあります。どうか我が家の子どもたちが健やかに成長出来るようお力添えください。中通り地区に住む人も原発事故の被害者で今でも苦しんでいること、広く世の中に伝えていただき、必要な補償は対象となることを望みます。原発事故調査に携わる皆様、情報量は多くお持ちかと思います。おなじ境遇の方の話、又補償の情報などありましたらお教えいただきたいと思います。」（2017-645）

「現時点で、このアンケートを続けている方々とは、同じ年齢の子を持つだけでない、共感を得られる貴重な同志だと思うので、中通りのできるだけ広範囲の地域の方々が話し合えるような機会を作っていただければと思います（近くの知っている立場では、それ以外の家庭や勉強などのことで気を使うようになり、かえってあまり素性を知らないほうが気楽に感じるものです）。案として受け取っていただければ幸いです。（中略）このアンケート回答でもあったように、不平不満は語られるでしょうが、それはきっかけの一つであって、これからの未来の子どもについて、広い視野で、進路のことなどどう考えているのか。田舎で狭い地域の関わりしかない状態なので、話せるようなこともなく、不安は常にあり、なかなか解消される機会もありません。これからもアンケートは続けていきたいと思いますが、その先の提案も（どうしたいかなど）プラス α されれば、続けていく意味も深くなるのではないでしょうか。行き場のない私たちの思いでなく、行き場のようなものを作っていただきたいです。」（2019-396）

（8）肯定的な意見

「子どもの体や心についてのアンケートはこれまでもありましたが、母親の話、気持ちを問われることは少なかったように思います。このような機会を与えていただき感謝します。」（2013-1882）

「こういった調査を継続して行ってもらえる事は非常に有り難い事です。私自身福島に住みつづけるために頑張ってきた２年余りでしたが、未だに揺れ動いている内面がある事に改めて気づかされた設問が多々ありまし

た。」（2013-2426）
「最初は何でこんなのが？と思っていましたが、福島の事情を理解してもらえると思うと心強く感じています。」（2014-1446）
「いつも本音をだれにも言えずこの場を借りてすみません…。」（2015-844）
「久しぶりにこの調査に回答して感じたのですが、子どもの行動で気になることがいくつかあるな、以前は問題なかったことで気になることが出てきたなと思いました。それが震災・原発事故と関連があるかどうかは分かりませんが、だからこそ、このような継続した調査が必要なのだと思いました。（中略）今後とも継続した調査をよろしくお願いします。」（2015-1099）
「今もなお、この事故のことを忘れることなく調査してくださることに本当に感謝します。今後ともよろしくお願いいたします。」（2016-213）
「このようなアンケートを受けることで、あの時を思い返すきっかけとなっています。つらい思いというより、様々な援助への感謝の気持ちがわいてきます。」（2016-580）
「このアンケートがきっかけとなり、もう一度震災の時の事を思い出しました。日々の暮らしで忘れていた災害対策や健康対策をもう一度見直したいと思います。ありがとうございました。」（2016-933）
「原発事故はまだ終わった訳ではなく、現在進行形である事を再度自覚しなくちゃいけないことに、この調査で気付かされます。継続的に調査をしてくださっている先生方に感謝しつつ、震災や原発事故の当事者である私達をこれから支えてください。」（2017-131）
「このアンケートにも、参加させていただくことで、夫や家族と大震災のことについて思い返してみたり、話し合ったりする良いきっかけとなります。」（2017-297）
「アンケート記入時、自分自身のことやこどもへの対応や考え方等いつもふりかえることができ、貴重な時間となります。めんどうではありますが、こうした振り返りは自分自身を見つめ直す上でも大切に感じました。」（2017-619）

「最初は、福島の事故の事を利用されているようで、勝手に反発するような気持ちでアンケートに回答していました。すみません。現在では、長く見守っていただいていることに感謝しています。」（2018-52）
「6～7年前は、アンケートがわずらわしく、私たちは、実験材料か！？と、イライラやっていましたが、今では、『遠くに見守り励ましてくださっている団体がいるんだなー。』と、温かい気持ちになれます。」（2018-267）
「こうして忘れられず記録をのこせてもらえてる事うれしく思っています。」（2018-294）
「子どもにも何があったのか、このアンケートを続けること、答えることの意味を、教えてあげたいと思っています。」（2018-440）
「定期的にアンケートの結果を送ってくださり、ありがとうございます。」（2019-21）
「調査の用紙今までより厚く、キレイになりましたね。」（2019-23）
「今回このアンケートが届き、前回からもう1年が経ったのかと、月日の経つことの早さをしみじみ感じました。（中略）このアンケート調査もそうですが、自分と直接関係のない人たちのことを考えてくださる人がいるという事実。忘れないようにしたいと思います。」（2019-143）
「このプロジェクトの結果をまとめた冊子、とても参考になります。いろいろな考えがあるのだなーと知ることができ、いつか子どもにも読んでもらいたいと思っています。」（2019-151）
「震災から1、2年の頃は、調査、アンケート、検査などが色々あって、それ自体にもストレスを感じ、自分たちがモルモットにされている気がして辛かったりもしましたが、今アンケートを続けて行ってくださっているのはこちらだけです。まとめたものなどを読ませていただいて、私たちの現状や思いを記録し残してくださっていることの重要性を知り、感謝の思いに変わりました。」（2019-533）
「こちらのアンケートを拝見させてもらうと、同じような意見の方もいらっしゃるので、とても安心いたします。本音を話す方は福島ではタブー

な感じすらあるので、他のお母さん方の意見を知れるので、ありがたいです。ありがとうございます。」（2019-543）
「このアンケートが届くと、もうそういう時期なのかあ…と。でも一番身近で、震災のこと、心や体のことを心配してくれているのがこのアンケートなんじゃないかな…と思うぐらい、郡山は線量計を任意の子に持たせるだけで、他は何もなくなりました。アンケートを通じ、遠い方に心配していただいていること、ありがたく思います。」（2019-564）
「このアンケートが届くと震災のことを思い出すくらい、普段は日々のことに追われて、震災のことは忘れているのが現状です。（中略）手元に届く冊子を手に取ると、様々な考えや想いがあることに気付かされます。同じ県内にいながらも、どこか他人事のように感じることもあります。復興と一言でいうのは難しいですね…。」（2019-636）

（9）肯定と期待
「原発事故後、このようなアンケートにも福島の子供たちのためになれば！と思い何度も協力してきました。こういったアンケートは、個人のプライベートな事まで、アンケートといっても個人が特定できるようなかんじになってて不快な気分になる事もありますが、協力していきたいという気持ちでいます。このアンケートで福島が少しでも住みやすくなるように望みます。」（2013-1120）
「原発事故があった事さえ、忘れがちだが、こういったアンケートや検査の用紙が来るたびに汚染地域に住んでいるんだと自覚させてもらえる。願わくば、この調査が有効的に使われる事を強く望みます。」（2015-566）

（10）肯定的だが疑問もある
「少しでも力になれるなら、と今回参加しました。このアンケートが実際どう生かされていくのか知りたいと思います。」（2013-1417）
「正直な事を言いますと、未だアンケートの趣旨や真の目的がわかりませ

ん。しかし、私の中では何らかの意味があったと感じています。」（2015-950）

（11）肯定と否定が入り混じっている

「このアンケートに答えながらわが子の様子について性格だと思っていたことが震災の影響なの？と考えてしまったり自分の行動や考えをふり返ることでやっぱり避難したいと思っているのかな？など久しぶりに色々考えてしまいました。そういうことを考えたり気付いたりすることが心を不安定にさせるならアンケートはもうやりたくないと思う反面、本当の気もちを吐き出したり原発のこわさを忘れないようにしたりするためにもアンケートは大事なのかなとか…」（2013-51）

「封書が送られてきた時、不愉快に思いました。アンケートに答えるか迷いましたが、答える事により、多くの方が、良い方向に向かうのであればと思い、答える事にしました。」（2013-1839）

（12）その他

「今回送ってもらった調査について、『何の為にやっているのか？ちゃんと本物の組織がやっているのか？（今回のアンケートに答えた内容について何か悪用されるのでは？）』という不安を口にしたママ友が結構いました。せっかく科研費を使って調査されるのですから、メディア等を使って事前の周知を行えば回収率も上がるのでは？と思いました。」（2013-1387）

「新聞をとっていないので、この調査結果がいずれ何らかの形になった時に、情報が入ってこないのではないかと不安です。」（2013-2004）

「アンケートに答え送っていいものかとためらっていました。」（2013-2243）

「調査結果（全員分）がわかったら知りたいです。」（2013-2428）

「アンケートを提出しないと決めていましたが、あまりにも行政の対応が悪く、怒りがおさまらないので、お答えできる部分のみで提出いたします。子供の氏名等の記入を考えましたが、将来悪影響を及ぼしかねませんので

無記名で提出いたします。ご参考にならない場合は、破棄していただいて結構です。アンケートに全部ご協力できなくて申し訳ありません。」（2013-2477）

「もともと放射線量は、あまり気にしすぎないタイプでしたが、久しぶりにこのアンケート記入をしていて、さらに気にしていない自分に気付きました。」（2015-521）

「こちらのアンケートで、あれからもう 4 年か～と改めて気付かされました。」（2015-845）

「以前と比べて、気にしなくなっていることが多くなっていると今回、回答してみて気付きました。」（2016-484）

「子供のことを考えたら、もっと放射能のことを気にしなければいけないのかも知れないけど…正直このアンケートが来なければ震災のことは忘れているし、普通に生活しています。」（2016-833）

「記憶が徐々に薄れていくけど、こういったアンケート等がくると思い出す。一生、背負っていかなければならないものですね。」（2017-336）

「このアンケートをすると、放射能が周りにあることが普通になっている生活（ガラスバッジを子どもがもちあるき、学校や公園の測定機器で放射線量を気にしている生活）がおかしいことなんだよなぁと考えさせられます。」（2017-549）

「このようなアンケートや報道等のきっかけがないと、震災・原発事故があったということを意識しないようになってきている。」（2018-26）

「7 回目のアンケートということで、以前した回答と現在の自分自身の心境が変化していたのに驚きました。」（2019-13）

4.3　研究についての意見

研究についての意見は全体的に少数であるが、第 1 回（2013 年）から第 3 回（2015 年）までは、期待を寄せる声が最も多く、第 5 回（2017 年）、第 7 回（2019 年）では肯定的な意見が見られるようになった。初期は期

待を込めて研究に協力し、その後、続けて調査成果がフィードバックされることによって、研究への信頼が増していることが考えられる。

（1）否定的な意見

「ただの研究材料にはしないでほしいものです。逆の立場になって考えてほしいものです。」（2013-297）

「研究したければ、福島に住んで体験してください。」（2013-893）

「何故、福島の将来を、原発事故とは無縁の福岡大が研究するのか、理由や動機がわかりません。単に学術的なアンケートの為に行うのであれば、やめていただきたい。本当に福島の事を考えて、少しでも協力してほしいと願います。」（2013-1579）

（2）肯定的な意見

「6 年がたち、県内ですら風化を感じますが、このような調査をして、記録を残し、後世の人々へ知恵を残すための研究をしてくださっていることに有難いと思います。」（2017-230）

「続けての研究、ありがとうございます。大変だと思いますが、よろしくお願いします。」（2019-293）

「記録を残していただけていることで、前述の不安の緩和に間違いなくなっております。研究してくださっている方、それに関わる全ての方に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。」（2019-612）

（3）疑問と期待・注文

「大学の研究が進むなら、それをまとめた本などは出版する予定ですか？福島の人には無償でくばってほしいです。」（2014-568）

（4）期待・注文

「私達にとって事故は過去となって終わるのではなく、ずっと将来への不

安もあります。すごく遠いところで研究してくださるのでしょうが、どうか書類に出す記号だけじゃなく感じてください。」（2013-199）
「データを集めたからといって、健康に直接つながるとは考えられないが、しっかり実行力をもって行動してほしい。興味本位の研究で終わらないことをいのります。」（2013-1577）
「不安を語り合っても何の解消にもならないので少しでも現状の改善、将来の安心安全が確保できるよう研究の活用を望みます。」（2013-1669）
「今後、より有意義な研究ができることをお祈りしています。私たちの意見がただのサンプルではなく『子供に未来を希望いっぱいに生きていってほしい』と強く願う親たちの気持ちが込もってることを忘れないで調査・研究をすすめていただければ救われます。」（2013-2201）
「どうぞ、後世の役に立つ研究をされてください。」（2013-2331）
「普通に生活したいという思いから、福島で暮らす私たちでさえも、放射線の数値がマヒしている状態になる時もありますが、今後のためにもデータとして研究でもよいですから取り組みを続けていただきますようお願いいたします。そしてごくわずかに求めている人たちのために情報開示をしてください。協力させていただきます。」（2014-1081）
「研究のため研究で終わらないように、因果関係が究明されるよう、息の長い取り組みを期待しています。」（2014-1286）
「科研費をとられ、施策の提案とするための研究とのことですが、いただいたレポートはテキストばかりで、統計処理された数値などはありませんでした。別にレポートを提出されているのかもしれませんが、知りたいのは、子供をもつ親の心境の変化と、福島県外の人の気持ちです。線量からくる健康被害よりも、病的に線量を恐がること、外部からの偏見、そういったものから起因する健康被害の有無を調べられているのですよね？東電の原発事故、線量の存在を忘れてはいけませんが、そんなことよりもっと楽しいことを求めて日々生活することが健康につながると感じます。」（2015-112）

「この調査に協力するにあたり、本当に何の為に？と自分で考えてみました。事故の影響と安易に結びつけ、福島の子ども達は体に異常が出ていると県外の人々に誤解されている事は嫌ですので、研究は慎重にお願いしたいです。そして、大学での学習題材だけとならないよう、後世のために、伝え継がれていくものであるよう願い、今回の調査票を送らせてもらいます。」（2015-304）
「私自身今のところ震災や原発事故が原因の不安や不調が感じられず、調査の参考になるのか疑問ですが、有識者の方々の知恵の出し合いを注目しています。」（2015-1024）
「研究の成果で少しでも動かされる事実を期待いたします。」（2017-657）

（5）その他
「お顔の見えない研究者の方々のやりとりも今後いつまで続けていくのかもわかりませんが、（子供が成長して亡くなるまでですか？）地道に子育て、教育、仕事とやっていこうと思っています。」（2018-246）

4.4　調査票の問いについて

調査票の問いについては第1回（2013年）、第2回（2014年）は否定的な意見が多く見られたが、第3回（2015年）以降は否定的な意見は減り、その他の感想や問いに関連する話題が見られた。

（1）否定的な意見
「アンケートがたくさんでかなり疲れました。そんなことも聞くの？！と思うような質問もあって“このアンケート大丈夫？！”と少し不安に思いました。（個人情報）（中略）もっと簡単なアンケートにしてほしい。」（2013-453）
「あまりにも質問が多く正直面倒くさいと思った。何の参考になるかは不明だが、この福島にいないあなた方になにが分かるのだろうと思った。」

（2013-629）
「このアンケート１冊でどれほどの現況を知ることができるのかわかりませんが、１つ１つの質問が傷をえぐられている様な気がしてなりません。不安を抱えずに福島で子育てをしている人はいないと思います。質問の問いが、原発事故の影響ありきの立場から投げかけられている様にしか感じません。それでなくとも不安なのに、こういった機会でさらに親は子どもに何をしてあげられるのか、何をしてあげているのか、と責められている様な気さえします。」（2013-1080）
「選択肢のすみずみに“福島の子供は可哀想”という仮説のもとに考えられた質問票であるように感じ、イライラします。」（2013-1459）
「余談ですが、問 37（2013- 問 37：あなたとあなたの配偶者が最後に卒業した学校はどちらですか。）は、何の必要性があるのでしょうか。調査には、あたり前かもしれません。でも申し訳ありませんが、気分を害しました。ただでさえ、不安感やイライラ感が、あるのに、学歴のような事を問われている気がして、残念でした。今、福島に住む人々は、過敏で、繊細です。調査とはいえ、何か、説明が欲しかったです。」（2013-1774）
「このアンケートは、かなりプライバシーに関する質問が多くて、少し戸惑いを感じました。」（2013-1846）
「今も里帰り出産で実家に戻ってきているだけであり、アンケートの答え方がむずかしい。いつの家の線量の話なのかや、『震災後半年』と言われても答えられない。避難していないことが前提だったのか？アンケート内容も似ているものが多くやりづらかった。もっと終えた後にスッキリとした気持ちになる内容にしてほしい。2 回目があるのなら少し考えていただきたい。」（2013-1979）
「職業、雇用形態、年収、学歴などは原発事故とは何の関係もないような気がします。時間をかけて書いているので、あまり関係のないような質問はない方がいいと思う。あとは、原発事故からかなり時間がたってしまっている今、このようなアンケートをかいても、その時の気持ちをちゃんと

思い出せていないと思う。」(2013-2149)
「収入については収入や学歴で子どもがガンにでもなる事を想定しているとしか感じとれませんでした。最初からこのアンケート自体が上から目線のような感じ。」(2014-568)
「質問の項目が、どうしても、震災に結びつけるような回答になるよう、誘導されているように、感じてしまう。」(2014-604)
「前回もでしたが、不快にさせる質問が多いですね。協力はしていきたいと思いますので記入はしましたがこれを書いた後は不快きわまりないです。」(2014-664)
「前回アンケートにお答えしていた時も感じた事ですが、〝～ヵ月後、～年後〟などという時系列での回答には無理があるなぁ、という印象です。～ヵ月たったから、～年たったから、という事だけで回答が変わるという事はありません。前回の回答と今回の回答が違うのは単に季節のせい、あるいは気分のせい、だったりします。」(2014-745)
「質問中にあった『保養』という言葉にはどうも違和感というか、抵抗感があります。学校や保育所の知り合いでそういう語を使う人を知りません。一部の方はよく使うようですが、どうも、私たちの街が危険視されているようで、嫌な気持ちにすらなります。問 12（2014- 問 12：ここ半年間、保養にどれくらいの頻度で出かけていますか。）については『ない』にしました。ただの旅行なら行きますが。）親の心身の状態ですが、放射能の影響を問う質問（問 14）(2014- 問 14：あなたとお子さんの健康状態は、福島原発事故による放射能の影響をどの程度受けていると思いますか。）について。放射能なんかよりも、一部のメディアや web 上の方々の嫌がらせや差別の方がよほど(特に)メンタルへの影響がでてくると思います。そういうモノの調査はしないのでしょうか。」(2014-1104)
「前回とダブる質問が多いような…。もう少し簡素化してほしいです。大変でした（答えるのが）こういった取り組みは非常にありがたいです。ただ、あまり福島を特別視しないでほしいです。みんな普通に暮らしていま

す。震災のことを思い出すのは時々辛いです。」（2014-1560）
「質問についてですが。氏名明記の質問として何ヶ所か問題があるものがあると思います。（収入に関して（問 37）（2016- 問 37：過去 1 年間のあなたのお宅の収入は、税込みでいくらぐらいでしたか。）や甲状腺の結果、病名の記入）など特定される事はないとしていてもあまりに具体的すぎるのはどうなのでしょうか。」（2016-1011）
「そろそろ 10 ページのようなネガティブな質問（精神健康度質問票：筆者注）はいらない気がします。アンケート内容が長くいつも同じなので、もう少し簡単に、もしくは終わりでよいと思っています。」（2019-397）

（2）肯定的な意見
「私自身福島に住みつづけるために頑張ってきた 2 年余りでしたが、未だに揺れ動いている内面がある事に改めて気づかされた設問が多々ありました。」（2013-2426）
「問われて、初めて考えることも、現在の状況の見直しもすることができるので、いい機会になったように感じております。」（2014-58）

（3）疑問
「何で収入と家計の質問があったの！？」（2013-1113）
「今回のアンケートもこまかい項目が多く、やはり家計や収入、雇用形態は記入する必要があるのか？」（2014-868）
「現状、うまくいっていないことが、全て災害のせいだと考えてしまうようなアンケート内容は、回答していて、いつもどうなのかと思ってしまいます。」（2015-900）
「何度かアンケートの記入をしてきたのですが、『これって、原発のせい？』って疑問に思ってしまうことがあります。」（2016-987）

（4）期待・注文

「毎年これ（アンケート）を続ける意図が分からないし、公表する必要があるのかよく分からない質問が多い。何を目的としているか分からないアンケートが続くのはどうかと思います。子育てに不安はあるものの、原発（事故）が全てではありません。色々な意味で環境を整えることは重要だと思いますが、アンケート内容を公表する目的をもっと明確にして内容を絞ってください。」（2013-436）

「正直、思っていた内容と違う項目もありました。もっと、聞いてほしい（というか聞くべき？）内容もあるのではと思う部分もありましたが。（例えば、私のように移住した場合の答え方とか・・）当事者が思うこと、当事者でない方々が思うことにはずれがあります。その部分が少し心配です。どうか私達を助けてください。よろしくお願いします。」（2013-1929）

「後半の内容が、福島に残っている方前提での質問が多かった為、もう少し、自主避難中の家庭にも配慮した質問内容（書き方）にしていただきたかったです。」（2013-2473）

「アンケートの回答に『どちらともいえない』という項目があればと思いました。」（2017-165）

（5）その他

「住民票を置いているのは福島で、現在避難している人もいるので、このアンケートは現在の住まいが、この書類が送られてきた住所と異なっているため、分かりづらかった。」（2013-1167）

「体調の変化、心の変化全てが、原発事故とだけ結びつけられてしまいそうなアンケートで、少し答えるのが難しいと感じたところがありました。」（2013-1503）

「質問に答えたり、他の方と話していたりして、今の身体や心の負担が、震災のせいなのか？原発事故のせいなのか？わからなくなる。」（2014-760）

「このアンケートを受けていると、震災よりも、私達の仕事のせいで子供

と一緒に遊べていなかったり、外遊びをさせてあげれなかったり、（帰宅が6：30なので、それから夕食を作る為、しかも今の時期は暗くなっていますし、夕食を作っている間はTVを見せている事がほとんどでした）そちらの方が問題なのかもしれないと思いました。」（2015-499）
「震災後、避難などした結果、県外に移住する道を選びました。なのでアンケートの「お住まいの地域」というくくりには答えにくいものも多いので、県外に住んでいる人はアンケートの内容を変えていただくと答えやすいです。」（2016-507）
「問7（2017-問7：お子さんのここ半年間の行動についておうかがいします。）で子供の不調が多くなってしまいましたが、発達障害もあり、アンケートの答えた時期、不安傾向が強く出ていたため、このような回答をさせていただいております。」（2017-358）
「モニタリングポストが撤去されることはこの調査で知った。」（2019-389）
「子どもや私に関する体調についての質問も、チェックがつくのは事故のせいではなく、年齢のためかと思います…。」（2019-697）

4.5　本プロジェクトについて

本プロジェクト（福島子ども健康プロジェクト）については第1回（2013年）から第7回（2019年）を通して肯定的な意見が多く、第1回（2013年）は、期待を寄せる声も多くあった。

（1）否定的な意見
「勝手に個人情報を入手して自分達の研究として、最低なプロジェクトですね。こんなので税金を使用して国も教授たちも福島を利用して良かったですよね。健康相談するくらいなら、実害が出てから金を使ってほしいものです。自分の子どもが何か勝手に実験・研究に使われているような気がしてなりません。」（2013-317）
「今回のプロジェクトも、『なぜ福岡？』と思ってしまったが、遠方の方々

が福島に住む親子を心配してくれるのはありがたいが、時々『ここ』に住んでみないのに何がわかる？と思ってしまう。温度差というか、うまく表現できないが。」（2013-2057）
「この健康プロジェクトもアンケートだけとって“環境を整える施策”なんてこの6年ないですよね？ただ記録をとりたくて利用されているだけの気がして､封筒が届くと嫌な気分になります。“安全な土地に住んでいて、福島になんて来たこと何回ありますか？”」（2017-47）

（2）否定的だが、期待・注文がある
「このプロジェクトに以前も回答しましたが、それで何かが変わったと感じられることは一つもありません。（中略）本当に子供たちの健康を考えるのであれば、アンケートなどのほかに定期的な健康診断（採決、尿検査（内部被曝）、甲状腺エコーなど）無償で実施していただいた方がよほど福島の親や子供たちの安心につながると思いますが。」（2014-1110）

（3）肯定的な意見
「このようなプロジェクトを作り、私たち小さな子供を持つ母親たちの不安解消や、子供たちのこれからの未来に少しでも安心して生活できるようにと考えてくれてるんだと思いとてもありがたいと思います。」（2013-193）
「今回はこのようなプロジェクトを立ちあげていただきましてありがとうございます。（中略）今回のプロジェクトにも積極的に協力していこうと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。」（2013-441）

（4）肯定的であり、期待・注文がある
「今回のような、子育て世代や小さな子供達の為のプロジェクト、とてもありがたいです。様々な意見をまとめ、調査していくのは大変かと思いますが、よろしくお願いいたします。」（2013-749）
「このようなプロジェクトが行われ、福島の子ども達に対して支援の手が

むけられることは、親として嬉しく思います。（中略）このプロジェクトで何か役に立つことがあれば、ご連絡ください。」（2013-759）
「遠く離れた福岡で、福島を心配して行動していただいていることに大変感謝いたします。よく、『モルモットみたいでイヤ』という県民もいるようですが、不幸にも初めての事故です。今回のことで、十分検証、研究がなされ、将来につながれば…と思っています。」（2013-1503）
「原発事故からもうすぐ３年経とうとしていて、世の中から忘れつつある出来事になりそうで恐い中、こんなプロジェクトを続けてくださって嬉しく思います。」（2014-515）
「福島のこと、遠くの方々も気づかってくださりありがとうございます。他県の方々と話すとき、『やはり人事だな』とさびしく感じることも多く、私達によりそっていただけることは本当に心強く感じます。」（2014-1463）
「このプロジェクトでは私が書いた内容に最初に反応してくださいました。すごく嬉しかったです。」（2015-704）
「このプロジェクトの小冊子を頂きありがとうございます。読んで色々な意見があるんだなと実感しました。これは、子供が成長し、大人になってからも、とてもためになる情報だと思うので、大切にしたいと思います。」（2015-927）
「福島子ども健康プロジェクトの皆様には、こうしてアンケートという形で、普段人に話せない悩みや不安を聞いていただき、それだけでも、いつも不安な気持ちがやわらぎます。こうして、福島の子供たちのこと、気にかけていただける方々がいる事にとても感謝しております。これからの益々のご活躍期待しております。」（2017-247）
「この様な、プロジェクトを続けてくださっていることだけが頼りです。自分もできることは協力していかないと…と思うだけです。」（2017-573）
「長い期間にわたって私たちへの様々なお心遣いを示してくださっているプロジェクトの皆さんにも感謝申し上げます。」（2018-143）
「訪問していただき、お話がうかがえたことも励みになっております。寒

さ続きますので、お身体ご自愛ください。」(2018-196)
「いつも継続的に経過等を見守ってくださり、このようなプロジェクトがあることに感謝している。今後もよろしくお願いします。」(2019-62)
「健康プロジェクトありがとうございます。色々な情報や声をきいて、不安になったり安心したりの繰り返しです。続けていただきありがとうございます。」(2019-64)
「アンケートの回答が遅くなりすみません。手元に届く冊子を手に取ると、様々な考えや想いがあることに気付かされます。同じ県内にいながらも、どこか他人事のように感じることもあります。復興と一言でいうのは難しいですね…。いつもとりとめもなく書いてしまいすみません。時節柄、プロジェクトの皆様方におかれましては、どうぞご自愛ください。」(2019-636)
「『福島子ども健康プロジェクト』は私達の声を聞いてくれる唯一の団体の様な気がします。今後も、子供たちの生活環境が少しでも良くなる様、声を聞いて、社会、行政にも届けてほしいと思います。」(2014-1224)

（5）疑問
「はっきり言えばこのプロジェクトの結果もどこまで信用してよいのか。事故後自分達の判断でここまで来ているので、信じられるのは自分しかないという気持ちになっている方も多いのではないでしょうか。」(2013-833)

（6）期待・注文
「文部科学省科学研究費の助成を受け、このようなアンケートをしているが、費用があるなら、除染に協力して、安心して、外出できる町にしてほしい。」(2013-284)
「今後フォローしていただくということで、ぜひ調査だけではなく、私たちの目に見える形でサポートもお願いしたいと思います。大変だとは思いますが、よろしくお願いします。」(2013-352)

「子供達を安全な所で遊ばせるプロジェクトとなり支援を長期に渡り実施してほしいです。」（2013-908）
「子ども健康プロジェクトを行っていただくのは有難いが、私達がまず必要としているのは除染だ。子どものために予算を使うのであれば、語り合う場やこのような郵送料よりも除染に使ってほしい。私達は子どものことを思い、自分自身が被曝しながらも除染活動を行って生活している。それでも通常の線量よりはるかに高い線量の中で生活している。遠く福岡で考えていただくより、現地福島に来ていただいて、一軒でも多くの住宅を除染していただいたほうがよほど有難い。除染された住宅はまだほんの一部ですから…。ホットスポットもありますが、国や県によると健康に影響はないそうですから、ぜひ福島にお越しいただければと思います。」（2013-1357）
「こういった災害には、1つの答えがある訳ではないので、自分をしっかりと持ちたいと考えており、このようなアンケートが、どのように役に立つのかも分かりません。実際に、県外に避難された方は、未だに福島に戻るのを恐れているとも聞きます。その温度差が取り除かれれば、晴れ晴れとできるのでしょうが、地域毎の認識のズレを考えたプロジェクトの動きであればと思います。」（2013-2047）
「このプロジェクトのおかげで、福島の子ども達に公園や絵本、あそび場ができたというニュースなど聞きません。（中略）福岡と遠くから文書で何だかんだと言うならば、福島県に住んで健康プロジェクトを考えてほしいと、本当に願います。よろしくお願いします。」（2014-568）
「自分でも我が子たちにこの思いを伝え、伝わってほしいと願いますが、こうして、プロジェクトを、立ち上げた皆さまには調査に関わった子ども達が成人し、悩み迷った時に私たち世代の覚悟を、メッセージを福島へ、日本中へ、世界中へ伝えていただける何かを形に残してほしいと思います。そうであれば、協力したいと思いますし、意義のある事だと思います。モルモットではない私達は決してアンケート結果だけを残すことを望んで

いません。声を発信する方法のない私達、子ども達の為に、代わりに社会へ…どうぞよろしくお願いいたします。」（2014-627）
「こちらの調査をされている福岡大学さまにお願いがあります。もちろん福島県内にのこった方が優先だと思いますが、昨年度のような健康相談会をぜひ米沢、山形市や新潟のように避難者が多い県でも行っていただけたらとてもありがたいのですが…。皆、地元へはなかなか相談をするために戻れませんので。」（2014-799）

（7）その他
「保養関係のお得な情報があることもこのプロジェクトのアンケート結果で少し知りました。」（2015-1011）
「このプロジェクトが来るたび、あの時を思い出します。そして、自分の気持ちの変化にもおどろきます。」（2018-228）

4.6　カードについて

クリスマスカードやバースデーカードなどカードについては第2回（2014年）以降、肯定的な意見が続いている。2013年の12月から、調査対象者の子どもへクリスマスカードを送付し始めた。翌年からはバースデーカードを送付している。肯定的な意見には、単純な謝辞の他に、子どもが喜んでいるという声、見守ってくれる人がいる、心強く感じるなどの声がある。

（1）否定的な意見
「子供へのカードを送る気づかいよりも、もっと前向きな研究報告、マスコミへの情報提供を願います。」（2015-112）
「紙がもったいないので、Birthday カードいりません。」（2019-528）

（2）肯定的な意見

「クリスマスカードありがとうございました。娘は、思いがけず届いたカードを見て、まるで、サンタさんから届いたのかと思う程、とても感激していました。お礼のおたよりもせず申し訳ありませんでした。今日は私が、これを書いている間、娘は退屈することなく「ぬりえ」に取り組んでいたので、助かりました。」（2014-28）

「クリスマスカードありがとうございました。息子が大変喜んでおりました。息子のひき出しを開けたら、大切にしまってありました。」（2014-410）

「クリスマスカードありがとうございました。『あなたのことを心配してくれてる人がいるのよ。』と教えたらカードを見て喜んでいました。机にかざってあります。」（2014-823）

「昨年のクリスマスに子供あてにクリスマスカードを送ってくださったのは、このプロジェクトの方達ですよね！息子はまだ字が書けないのでお返事は書けませんでしたが、かなり喜んでおりました。ありがとうございました！」（2014-1118）

「クリスマスカード、毎年ありがとうございます。障害のある息子ですが、『今年も来た！』と喜んでいます。」（2018-55）

「いつもバースデーカードなどありがとうございます。息子は“やったー！”と喜んでいます。お兄ちゃんはいいなぁと言いながら、でも２人で仲良くみています。」（2018-254）

「バースデーポストカードなど、ありがとうございます。６～７年前は、アンケートがわずらわしく、私たちは、実験材料か！？と、イライラやっていましたが、今では、『遠くに見守り励ましてくださっている団体がいるんだなー。』と、温かい気持ちになれます。」（2018-267）

4.7　謝礼について

謝礼の図書カードについては、第１回（2013 年）は否定的な意見があったが、第３回（2015 年）以降は見られなくなった。

（1）肯定的な意見

「前回は、提出が遅くなったのに関わらず、ごていねいに図書カードまでありがとうございました。」（2014-413）

「前回いただいた図書カードで子供に絵本を買いました。ありがとうございます。」(2014-464)

「本を読むことが大好きな子なので、謝礼として頂く図書カードも嬉しく、活用させていただいています。本当にありがとうございます。」（2017-186）

「誕生日のカード、図書カードなどは子どもも喜んでいて嬉しく思っております。ありがとうございます。」（2019-397）

（2）その他

「謝礼などいりません。このアンケートをとった言葉、思いを国や東電、うったえてください。私達個人が何を言ってもこの何年もとりいってくれるところはありません。意味のあるアンケートにしてください。」（2013-1093）

5. 自由回答の変化から読み取れるもの

調査のあり方に言及した自由回答のうち「本調査について」が半分以上を占め、次に、「調査票の問いについて」と「本プロジェクトについて」が多い。また、第1回（2013年）では「否定的な意見」が最も多く、第2回（2014年）以降は「肯定的な意見」が最も多い。なぜこうした変化が生じたのか。こうした自由回答の変化から読み取れるものは何だろうか。

表５　調査に言及した回答の記述内容の分類１（上段：件数、下段：割合）

	計	第１回（2013年）	第２回（2014年）	第３回（2015年）	第４回（2016年）	第５回（2017年）	第６回（2018年）	第７回（2019年）
調査というもの全体について	32	21	6	3	1	0	0	1
	(6.3)	(14.6)	(5.8)	(4.8)	(2.1)	(0.0)	(0.0)	(1.6)
本調査について	259	83	44	29	18	31	21	33
	(51.1)	(57.6)	(42.3)	(46.8)	(38.3)	(60.8)	(55.3)	(54.1)
研究について	20	8	4	3	0	2	1	2
	(3.9)	(5.6)	(3.8)	(4.8)	(0.0)	(3.9)	(2.6)	(3.3)
調査票の問いについて	75	33	15	6	6	5	2	8
	(14.8)	(22.9)	(14.4)	(9.7)	(12.8)	(9.8)	(5.3)	(13.1)
本プロジェクトについて	74	22	24	7	3	5	4	9
	(14.6)	(15.3)	(23.1)	(11.3)	(6.4)	(9.8)	(10.5)	(14.8)
カードについて（※）	114	0	29	22	21	13	13	16
	(22.5)	(0.0)	(27.9)	(35.5)	(44.7)	(25.5)	(34.2)	(26.2)
謝礼について	15	6	5	1	0	1	1	1
	(3.0)	(4.2)	(4.8)	(1.6)	(0.0)	(2.0)	(2.6)	(1.6)

※ 2013 年 12 月より、毎年 12 月にクリスマスカードを送付し、2014 年度より、バースデーカードを送付している。

表６　調査に言及した回答の記述内容の分類２（上段：件数、下段：割合）

	計	第１回（2013年）	第２回（2014年）	第３回（2015年）	第４回（2016年）	第５回（2017年）	第６回（2018年）	第７回（2019年）
肯定的な意見	229	16	49	31	29	27	29	48
	45.2	11.1	47.1	50.0	61.7	52.9	76.3	78.7
否定的な意見	120	61	30	10	3	8	1	7
	23.7	42.4	28.8	16.1	6.4	15.7	2.6	11.5
疑問	53	25	11	8	5	1	1	2
	10.5	17.4	10.6	12.9	10.6	2.0	2.6	3.3
期待・注文	104	49	25	10	3	11	3	3
	20.5	34.0	24.0	16.1	6.4	21.6	7.9	4.9
その他	83	22	12	12	9	10	8	10
	16.4	15.3	11.5	19.4	19.1	19.6	21.1	16.4

各回のサンプル脱落数を表７に示す。表６は意見の数、表７は人数であるため、数が異なる場合がある。なぜなら、一人が複数の項目について否定的な意見を述べている場合もあるからだ。

表７　各回のサンプル脱落数

第１回→第２回	人数	割合（%）
第１回で否定的な意見の人	57	100.0
否定的→肯定的	2	3.5
否定的→脱落	**21**	**36.8**
否定的→否定的	5	8.8
否定的→その他	29	50.9

第２回→第３回	人数	割合（%）
第２回で否定的な意見の人	29	100.0
否定的→肯定的	1	3.4
否定的→脱落	**13**	**44.8**
否定的→否定的	1	3.4
否定的→その他	14	48.3

第３回→第４回	人数	割合（%）
第３回で否定的な意見の人	10	100.0
否定的→肯定的	0	0.0
否定的→脱落	**3**	**30.0**
否定的→否定的	0	0.0
否定的→その他	7	70.0

第４回→第５回	人数	割合（%）
第４回で否定的な意見の人	3	100.0
否定的→肯定的	0	0.0
否定的→脱落	**3**	**100.0**
否定的→否定的	0	0.0
否定的→その他	0	0.0

第５回→第６回	人数	割合（%）
第５回で否定的な意見の人	7	100.0
否定的→肯定的	0	0.0
否定的→脱落	**0**	**0.0**
否定的→否定的	0	0.0
否定的→その他	7	100.0

第 6 回→第 7 回	人数	割合（%）
第 6 回で否定的な意見の人	1	100.0
否定的→肯定的	0	0.0
否定的→脱落	**1**	**100.0**
否定的→否定的	0	0.0
否定的→その他	0	0.0

当初は、調査依頼を受けてのネガティブな心情や、本調査・プロジェクトに対する疑問・批判などの批判的な回答が優勢であったが、これらは回を追うごとに減少し、代わって、調査への賛同や、謝辞などの肯定的反応、そして本プロジェクトへの期待・注文の記述の比重が高まっている。

こうした変化には、大きく分けて 3 つの要因があると考えられる。

第 1 に、調査参加者の構成自体の変化がある。すなわち、調査に対して批判的な意見を述べた人のうち相当数の人が次の回には回答しなくなり、批判的な意見の数が相対的に減少したことによる影響である。例えば、第 1 回調査で否定的な意見を含む回答をした 57 名に注目すると、うち 37% にあたる 21 名が、第 2 回調査には回答しなかった。同様に、第 2 回調査で否定的な意見を含む回答をした 29 名のうち、45% にあたる 13 名が、次の第 3 回調査に回答しなかった。このように調査に対して批判や疑問の意見を持つ参加者が一定程度、退出していくことで全体の意見の構成が変化した側面があることは否定できないだろう。

第 2 に、回答者の状況や、それに対する受け止め方が実際に変化したという可能性がある。例えばある回答者は、第 2 回調査（2014 年実施）で、事故の数ヶ月後の状況について「県より 3 月 11 日以降の生活を事細かに書くよう、厚い冊子が送られてきた時は、本当に自分達が、被曝者として実験台にされているような気持ちになりました」とふりかえった。そのうえで、「しかし 1 年 2 年と時が過ぎる中でその受け止め方にも変化が出てきた（中略）数十年後、再び何処かで原子力災害が起こった時、私達のデータが何らかの形で役に立てばいい」（2014-463）と述べている。

第 6 回調査（2018 年実施）では、次のように、とくに本調査に対する受け止め方の変化に直接触れた記述もあった。

「最初は、福島の事故の事を利用されているようで、勝手に反発するような気持ちでアンケートに回答していました。すみません。現在では、長く見守っていただいていることに感謝しています」（2018-52）

「6 ～ 7 年前は、アンケートがわずらわしく、私たちは、実験材料か！？と、イライラやっていましたが、今では、『遠くに見守り励ましてくださっている団体がいるんだなー。』と、温かい気持ちになれます」（2018-267）

第 3 に、こうした変化の要因の一部として、調査実施者側からのアプローチにも一定の効果があった可能性はあるだろう。第 1 回調査開始時に宣言したように、年に 1 回毎年 1 月に調査を実施し、その年の夏までには必ず調査結果を調査回答者に送付してきた。また、参加者からの疑問や質問はもとより、感謝の言葉をいただいた時には、できる限り手紙や電話等で応答した。2013 年 12 月からは調査対象者である子どもたちの喜びとなればと、誕生日とクリスマスにはカードを送付している。加えて、毎年数回、研究者が福島の調査対象者家族を訪問し、直接話を聞く機会を設定している。こうした調査の安定的・着実な継続、調査参加者との丁寧なコミュニケーション、そして現地訪問によるインタビュー調査の実施などによって、調査参加者との間での信頼関係の醸成に努めてきており、回答の変化にはこうした努力に対する評価も一定程度は反映されているといえるだろう。

このように自由回答を通じて読み取れる調査参加者の調査に対する捉え方について、回を追うごとに肯定的な内容が増加する傾向が見られるのは、複数の要因によるものと考えられる。この全体的な変遷を確認した上で、次に、調査参加者から寄せられた批判的な意見の主なポイントを取り上げて検討したい。

様々な批判的記述の中でも、調査依頼を受けることによって、ストレスや心痛、不愉快、不安などのネガティブな心情を惹起させられたという訴

えが多かったことが注目される。割合としては第１回調査が最も高く、その後、減少傾向ではあるものの、第５回（2017 年）で８件（調査のあり方に言及した自由回答のうち 15.7％）、第７回（2019 年）でもなお７件（同 11.5％）が、この種の回答を寄せている。これ以外の人たちの状況については推測するしかないが、調査依頼を受けた際に同様の心情を持ちながらもあえて記述はしなかった回答者や、こうした心情が原因となって回答自体を見合わせた人たちが、相当数いるものと思われる。事故から数年を経てもなお、原発事故に関連する調査を依頼するという行為自体が、当事者にとってはストレスの原因となりうることを示している点で、きわめて重要である。

しかも、こうしたネガティブな心情は、本調査、本プロジェクトに対する苦情を越えて、「調査」や「研究」、ひいては「科学」「専門家」といったものに対するトータルな不信感が表現されたものと考えられる。それを象徴するのが、自分たちが「実験材料」「モルモット」とされているのではないかという疑念や、県外からの調査依頼に対する不信感、不快感に関する記述であった。また、本調査やプロジェクトに対する批判・疑問の記述の中でも、調査の意義や目的に対する疑問の投げかけや、予算があるなら調査や研究以外のもっと効果的な目的に用いるべきだという記述があったが、これらも調査や研究、それを行う専門家への不信感を表したものだと理解できよう。

こうしたトータルな不信感は、より直接的に、原発事故による被害・影響に関する調査全般への否定的なコメントの形でも表れている。その内容は大きく分けると、①類似の調査依頼が多く、煩わしく感じていること、②調査の結果が現実に役立っているようには思えないこと、③これまで受けた調査では結果についてフィードバックや説明がなかったり不足したりしたこと、④調査を受けることによって不安ばかりが増す経験をしてきたこと――などであった。こうした好ましくない経験や、それを通じて形成された不信感が存在する中では、「この調査、このプロジェクトについて

の説明を丁寧に尽くせば、理解を得られるはず」という前提が通用しない状況が生じていたと言える。

「実験材料」とされているという疑念や、県外からの調査依頼に対する不信感も含めて、これら「調査」一般に対する不信感が表れた記述は、回を追うごとに減少しており、とくに第4回（2016年）以降はほとんど見られない。ただこれは、こうした意見そのものが当事者の間で弱まった結果というより、もともと調査一般に対して強い不信感、不快感を抱いている人が初めから回答しなかったり、一度は回答しても次からは参加しなくなったりしたことも大きく影響していると捉えるべきであろう。

第1回（2013年）から第2回（2014年）にかけて目立った調査票の質問項目に対する苦情の背景にも、同様に調査や研究というものに対する不信感があると考えられる。この点での苦情は、収入や学歴などの社会経済的背景に関する質問と、質問の多さ・細かさの2点に集中した。このような調査において回答者の社会経済的背景に注目することは、調査実施者である研究者にとってはある意味で自明なことであり、いわばその常識に従う形で、収入や学歴に関する質問も調査票に盛り込まれている。社会調査一般の水準から見て、調査票の質問項目やその問い方自体に、突出してプライバシーを詮索するような要素があったとは言えないであろう。しかしながら、調査というものに対して上述のような不信感が初めから存在する中で、そこには研究者側の常識が必ずしも通用しない面があった。これらの質問は、原発事故によって全く理不尽に受けている様々な被害や影響を、あたかも個々の調査参加者の社会経済的背景に帰する形で説明・理解しようとするような印象を与えたのではないだろうか。また、質問の多さや細かさという指摘も、調査実施者としては項目を厳選して構成した調査票も、調査参加者にとっては、回答する側の負担感や様々な都合に対する配慮を欠いているように感じられたことの表れであると考えられる。

第1回調査（2013年）では、調査結果を生かして、「今後、小さなお子さんを持つお母様たちが、原発事故や子育てに関する不安を自由に語り合

う場を作りたい」と述べつつ自由回答を求めたが、この語り合いの場を作るという構想に対しても批判が寄せられた。回答から読み取れるその直接の理由は、話し合いの場を作ったとしても争いや不安を増幅する結果にしかならないし、実質的な「解決」にはつながらない、というものであった。

今から振り返ってみれば、調査参加者との具体的な接点がほとんどない第1回調査（2013年）の時点で、こうした形で「語り合いの場」を提案することには無理があったと言わざるをえないし、多くの住民が、特段そうした場の必要性を感じていなかったというのが現実かもしれない。ただ、語り合いの場の提案に対する批判的な反応の背景には、そうした実際上の妥当性や必要性の問題に加えて、唐突に外部から「これが必要なはず」と決めつけられ、押しつけられたという感覚があったのではなかろうか。質問項目へのコメントの中に、「現在避難をしている人には、答えにくい質問がある」という記述があったが、これも単に技術的な不備を指摘したものではなく、同様の感覚に基づく面もあるだろう。つまり、本調査の一部の質問が、福島県内への居住を前提として回答を求めているような表現となっていることは、とくに避難中の調査参加者にとっては、あたかも調査実施者が、避難をせず元の住所に留まることが「標準」であると考えているように受け止められた可能性がある。

また、本調査に対する疑問、批判の中には、生活や健康状態の全てを、原発事故と結びつけるような調査は不適当だとの意見も見られた。住民にとって原発事故の被害や影響は大きいとはいえ、当然のことながら、その生活の全てが原発事故で埋め尽くされているわけではない。このような意見は、数としては決して多くはないものの、事故の被害や影響以外の側面も含む日常生活が、この調査により、丸ごと原発事故と関係していると決めつけられるような違和感を表現していると理解できるだろう。

このように多様で複雑であるはずの住民の生活のあり方について、外部から突然現れた研究者が一方的に決めつけ評価しようとしている、という印象を持つ人がいても不自然ではない。そのことへの反発が最も直接的に

表れたのが、「語り合いの場」の提案への批判的なコメントであったと考えられる。

プロジェクトへの期待や注文として最も記述が多かったのは、調査・研究だけでない実質的な支援や改善を求める意見であった。また、調査に対する批判の文脈では、「予算があるなら調査以外の、より実質的に役立つことに用いるべきだ」という記述もあった。調査参加者にとっては、「調査」や「研究」と、「目に見える改善」やそのための「具体的な活動」とは必ずしも直接結びつかず、場合によってはトレードオフの関係にあるとすら受け止められている。

これに対して研究者は、研究と問題解決との間の距離は意識しつつも、しばしば希望的観測を込めて両者を連続的に考える傾向があると言えるだろう。「原発事故後の親子の生活と健康を記録し、子どもたちが健やかに成長する環境を整えるのに必要な施策を提案すること」（第２回調査票より）が本調査の目的であるといった説明も、そうした考え方を表している。しかし調査参加者の中には、これでは問題解決への道筋として、あまりに迂遠すぎると不満を感じる人が少なくなかったと思われ、それが上記のような不満の表明につながったものと思われる。研究者にとって、こうした反応は少なからず驚きや戸惑いを感じさせるものだろう。

両者の溝を埋めることは容易ではないが、研究と問題解決との間の距離感や連続性に関して、調査参加者と研究者との間で認識に大きな違いがあるという前提から出発せざるをえないだろう。７年間の自由記述の変遷を全体として捉えると、調査参加者にとっての調査の意味は大きく変化してきたと言える。当初はストレスや心痛、不安を引き起こす原因であったものが、例えば、原発事故の風化を防いだり、自分自身も事故当時のことを思い出し、生活や育児を見つめ直すきっかけとなったり、積極的な意味づけがなされるようになってきた。

毎回の調査で寄せられる自由回答には、代表である成元哲をはじめ、プロジェクトのメンバーが、１件ずつ全て目を通してきた。個別の意見に対

してすべて返信などをしてきたわけではないが、とりわけここで見てきた意見に応答する形で試行錯誤を繰り返す中で、調査者にとっての調査の意味も変容してきている。とくに当初は、調査結果を踏まえて、主に子どもの母親である調査参加者たちが、原発事故の被害・影響を受ける中での子育ての不安や生活上の問題を語り合う場を設けることや、子どもの健やかな成長に必要な環境を整えるための施策の提案を目指してきた。しかし、上に見たような調査参加者からの反応を通じて、語り合いの場の提案に対する批判や、調査と実際の問題解決との間のギャップの問題に向き合う中で、子どもの成長に伴う生活と健康の変化をできるだけ長期間にわたって定期的に調査し、記録として次世代に伝えていくことに力点を置くべきであるという認識にシフトしてきた。語り合いの場づくりや、施策の提案が必要であるという基本的な考え方は現在も変わらず、プロジェクトの一部としてそれらに向けた取り組みも進めているが、7年間にわたって調査を継続する中で、調査者にとっての調査の意味づけが変化してきたことは間違いない。

ここで社会調査が、分断の再生産につながらないようにするためには何が必要か、という当初の問題意識に立ち戻ってみたい。分断のトラウマを抱える地域において、社会調査が分断の固定化や再生産ではなく、その修復に寄与できる可能性はどこにあるのか。その一つの手がかりが、今ここで述べたような調査者と調査参加者との間の相互作用の過程に含まれていると思う。すなわち、とくに本調査のような長期にわたる追跡調査の場合、調査を実施する研究者と、一般には研究の「対象」と考えられる調査参加者とが、調査の過程で様々な相互作用をする中で、お互いにとっての調査の意味がその都度、更新されることが起こりうる。そうした変化に開かれていなければ、そもそも長期にわたる追跡調査は成立しえないであろう。この更新のプロセスは、それまで自らが抱いていた調査の意味が解体され再構成されるという点で、それ自体が、修復的なプロセスである。本調査自体が、十分に修復的なものであったかは別途、客観的な評価、判定を受

ける必要があるが、少なくとも、こうした意味での修復的な社会調査というあり方が、分断のトラウマを抱える地域における社会調査の一つの指針となると思われる。

【参考文献】

眞嶋俊造・奥田太郎・河野哲也編著，2015，『人文・社会科学のための研究倫理ガイドブック』慶応義塾大学出版会 .

似田貝香門，1974，「社会調査の曲がり角――住民運動調査後の覚書」『UP』24：1-7.

中野卓，1975，「社会学的調査と『共同行為』――水島工業地帯に包み込まれた村々で」『UP』33：1-6.

安田三郎，1975，「『社会調査』と調査者－被調査者関係」『福武直著作集　第 2 巻』東京大学出版会：488-499.

桜井厚，2003，「社会調査の困難――問題の所在をめぐって」『社会学評論』53（4）：452-470.

松田素二，2003，「フィールド調査の窮状を超えて」『社会学評論』53（4）：499-515.

井腰圭介，2003，「社会調査に対する戦後日本社会学の認識転換――『似田貝－中野論争』再考」『年報社会科学基礎論研究』2：26-43.

森下直紀，2010，「水俣病史における『不知火海総合学術調査団』の位置――人文･社会科学研究の『共同行為』について」山本崇記・高橋慎一編『「異なり」の力学――マイノリティをめぐる研究と方法の実践的課題』生存学研究センター報告，14：319-348.

似田貝香門編，2008，『自立支援の実践知――阪神・淡路大震災と共同・市民社会』東信堂.

日本社会学会，2016，「日本社会学会倫理綱領にもとづく研究指針」，日本社会学会ウェブサイト（2019 年 10 月 5 日取得，https://jss-sociology.org/about/researchpolicy/）.

石牟礼道子，1969，『苦海浄土 わが水俣病』講談社.

石牟礼道子，2017，『花びら供養』平凡社.
矢守克也，2010，『アクションリサーチ――実践する人間科学』新曜社.
宮内泰介，2003，「市民調査という可能性――調査の主体と方法を組み直す」『社会学評論』53（4）：566-578.
植田剛史編，2017，『社会調査の成果を社会に還元するために――調査実践をとりまく磁場と調査者の役割を再考する（愛知大学人文学研究所 2017 年度ワークショップ報告書）』愛知大学人文社会学研究所 .
Bruce D. Sales, Susan Folkman, eds. 2000, *Ethics in Research with Human Participants*, American Psychological Association, Washington, DC.
Floyd J. Fowler, Jr., 2002, *Survey Research Methods: Third Edition*, Sage Publications, Inc.
Fran H. Norris, Sandro Galea, Matthew J. Friendman and Patricia J. Watson, 2006, *Methods for Disaster Mental Health Research*, New York: The Guilford Press.
Havidan Rodriguez, Enrico L. Quarantelli and Russell R. Dynes, 2007, *Handbook of Disaster Research*, Springer Science+Business Media, LLC
J. Michael Oakes, Jay S. Kaufman, eds. 2006, *Methods in Social Epidemiology*, San Francisco: Jossey-Bass A Wiley Imprint.
佐藤健二, 2011,『社会調査史のリテラシー――方法を読む社会学的想像力』新曜社.

〔謝辞〕

本稿は、福島子ども健康プロジェクトが毎年 1 月に行っている「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」のデータを分析したものです。調査にご協力いただいた方々に深く御礼申し上げます。本稿の分析に先立って、筆者らは第 15 回科学技術社会論学会年次研究大会（2016 年 11 月 5－6 日、北海道大学）で、同プロジェクトにおける調査者と調査参加者との間の認識のギャップについて報告しました（三上直之・成元哲「『参加型リサーチ』の限界とその克服の可能性」）。当日、質問やコメントをくださった方々に感謝申し上げます。また、自由回答データの分類に際して

は、福島子ども健康プロジェクト事務局の稲垣亜希子さんに多大なご助力をいただきました。記して感謝申し上げます。本研究は、科研費（24330165、15H01971、19H00614）とトヨタ財団研究助成（D18-R-0325）による成果の一部です。調査票、速報値や既発表論文は福島子ども健康プロジェクトホームページ（https://fukushima-child-health.jimdo.com/）から無料でダウンロードできます。